

財団だより

第111号

2006.9

# 多摩川



鉤はずし。川底などに鉤掛かりした時に用いる。  
青梅市郷土博物館蔵



写真撮影 伊藤 信男 (いとう・のぶお)  
世田谷区代田在住

## ■ たまがわの生きものたち ■

### アキアカネとヒガンバナ

多摩川では、1,483種の陸上昆虫が確認されています。トンボもそのひとつで、日本にいたると言われる約200種のうちの44種が観察、記録されています。アキアカネはアカトンボの代表種で、日本全国に生息しています。6月ごろ田圃で羽化後、暑い夏の間は山間地で過ごし、秋になって平地に下りてくるので、人の目に触れることが多くなります。近年減反や開発等による田圃の減少もあり、個体数が激減し、種の生存が心配されています。また、童謡の“赤とんぼ”のモデルも本種と言われています。ヒガンバナはお彼岸の頃にいっせいに咲くことからこの名があり、多くの場合群生して真っ赤な花を咲かせるので、私達の印象に強く残る花です。染色体数が特殊なため種子が出来にくいこの花は、チューリップのような地下の球根を増やして増殖しますが、茎にはアルカロイドを含む有毒植物でもあります。アキアカネやヒガンバナの鮮やかな赤色は、小さな生きものたちが私たちに秋の到来を教えてくれる信号と言えるでしょう。

撮影場所は、いずれも宿河原堰下流の多摩川左岸土手。小田急線「和泉多摩川駅」下車、徒歩15分。

(数値は、国土交通省の「河川水辺の国勢調査」のものを使用)

## Contents 目次

- 巻頭言  
多摩川・調布堰 雑感 ..... 2
- 特別寄稿  
昭島市の水道事業 ..... 3
- 多摩川支流の野川源流で学ぶ ..... 4
- 武蔵野みどり散歩 ..... 5
- 多摩川に遊び40数年 ..... 6
- 財団からのお知らせ  
助成研究募集のご案内 ..... 7

## 多摩川・調布堰 雑感



川崎河川漁業協同組合 理事  
(中原地区 地区長)  
安住 三郎

近年、上流域での下水道や浄化槽の整備が進み、多摩川の水質が改善されてきているからでしょうか、沢山の稚アユが遡上して来るようになりました。当組合が管理するエリアには1936(昭和11)年に水道水の取水の為に造られた調布堰がありますが、ここを飛び越えるアユの姿がテレビや新聞紙面で採り上げられることが増えるに連れて、アユの遡上を見に堰まで足を運ぶ人が年々多くなり、今では遡上が見られる3月～6月にはかなりの人の賑わいをみせています。年によって遡上するアユの数には変動が見られます。昨年は45万尾と少なかったのですが、今年は約130万尾と見込まれ、アユ漁への期待が大きく膨らんでいます。同時期には、やはり回遊魚のマルタの遡上も多く見られますが、サイズがアユに比べて大きいこともあって、とてもダイナミックで、舟の中にまで飛び込んでくるものもいるほどです。

当組合では、多摩川が汚れ、水質が悪く、アユの姿が見られない時期から、毎年、約5万尾のアユ、総計で5,000Kgのフナ・オイカワ・コイ・ウグイ・ウナギと、2,000Kg(約10万尾)のヘラブナを放流して来ましたが、この他に、川崎市議会の有志のご尽力によるマルタの放流が、1988(平成元)年から続けられており、マルタの遡上が近年比較的多く見られる結果となっています。こうして、多摩川での漁業や人々の楽しみである釣りが支えられてきました。しかしながら、予想外の出来事も多く、3年前には1万尾のコイが原因不明のコイヘルペスに罹り、組合の被害も甚大でした。それ以降は、コイの放流を止めています。また、魚類を主食にするカワウは、餌が少なくなると、アユやマルタを追って上流を目指して移動します。このことが、放流という地道な努力の積み上げにもかかわらず、多摩川でなかなか魚が増えない大きな理由になっているのです。カワウ対策はこれからの多摩川をかんがえる時、最優先して取組まれるべき課題のひとつであると思っています。

飲料水や工業用水の取水堰としての役目を終えた調布堰は、今年で丁度建造後70年が経ち、今では多摩川の環境の一部としてしっかりと組み込まれています。東京湾からの海水の潮止めとなっている調布堰の下流側では、潮の満ち退きにより水位が上下

します。1ヶ月に15日前後(約半分)ある中潮や大潮の時には水位が上がり、堰の上流、下流の水位差が少なくなります。そのタイミングを見計らってアユなどの魚たちは堰に設けられた3本の魚道を伝わって容易に遡上するのです。どんな生き物たちにも生きていく知恵と工夫が備わっているのには驚かされます。アユが堰下に群れているのは、この潮時を待っているからですが、これをアユが堰を越えられないと勘違いした大勢のボランティア達がバケツリレーでアユを上流側へ運んだり、堰の水門を一定期間開けてやったりしています。その結果、長旅に耐えられないひ弱なアユまで上流に上ってしまうことになったり、一時的に海より上った魚が堰より上流に進んだものの下流側に戻る機会を失い、死んでしまうことになったりする弊害が生じています。アユのため・・・との思い遣りは悪いことではありませんが、多方面への影響を考えた慎重な配慮の下での判断が必要です。

調布堰によって作り出された滝は、流れ落ちる水の躍動感を生み出し、桜の名所の多摩川台公園や草花の茂る河川敷に囲まれて、かつてお花見の時期などは、この辺りの多摩川べりは多くの人で埋まり、川面は数百パイのボートと渡し舟で賑わったものでした。その最後の一軒の貸しボート屋が今、店を閉めようとしています。「これも時代の流れ」として終らせてしまっても良いものでしょうか。私達の身近にある多摩川が、いろんな楽しみや心の癒しなどを与えてくれていることを思うと残念でなりません。これは、川が存在をどう捉えるか、人と川とがどう接していくのか、という問題でもあると思います。等々力水辺の楽校などで活躍されているNPOの方々、地域の皆さん、そして多摩川を愛する多くの皆様方とともに、我が組合も、非力ながらも、出来ることから取組んで、明日の多摩川のために、たゆまぬ努力を続けて行きたいと思っています。



渡し船の体験会  
(等々力水辺の楽校と組合のコラボレーション)

## 特別寄稿

# 昭島市の水道事業



— 安くて美味しい水を  
いつまでも —

昭島市水道部

浄水係長 臼井 三男

昭島市は、東京の西部、武蔵野台地が多摩丘陵と接する付近の、多摩川の左岸に位置しています。市の中央部から北半分は、最北部にある玉川上水までにかけて広がる台地（武蔵野台地）であり、中央部から南半分は、南端を流れる多摩川沿いの低地（沖積低地）となっています。また、台地と低地の境界は府中崖線と呼ばれる段差状の土地で、龍津寺や諏訪神社の湧水をはじめとする“湧き水”の宝庫となっていることから、昔から、昭島市は水には恵まれた所と言われて来ています。

1950（昭和30）年代からの日本の経済の高度成長期には、首都圏への人口集中がおこり、昭島市のある三多摩地区にも爆発的な人口急増をもたらしました。この結果、この地域の殆どの自治体の水道事業が地下水に頼っていたことから、深刻な地下水位低下を招きました。三多摩地区の自治体の多くが、この問題を解決する方策として、小河内ダムを完成させ、その後も利根川水系などに飲料水用のダムをいくつか建設して人口急増に備えていた東京都の水道システムに自らの水道事業を一元化する道を選んだのです。1974（昭和48）年に、小平市、東大和市、武蔵村山市、狛江市の4市が最初の一元化を実施しました。その後順次、毎年5～6の市町村が一元化を実施して行きました。比較的水に恵まれていた昭島市はこれを留保し、都の水道事業とは別個に、独自のシステムを営む道を選択しました。昭島市は、人口の増加に伴う水需要の増大に併せて、現在までに全部で5回（5期）の拡張事業を実施し、配水管網の整備などを図ってきた結果、今から約10年前に、普及率100%を達成しました。現在、深井戸20本による地下水100%の水道水を、約47,000世帯、約11万人の市民の使用に供しています。

昭島市の水道は、地下150～250mにある上総層群の東久留米層から、20本の深井戸により約40,000m<sup>3</sup>/日の地下水を汲み上げて使用しているため、水質は極めて良好で、少量の塩素などの消毒によるだけで水道水質基準の50項目全てに適合できています。その分、経費も少なく済み、水道料金は東京都のもののおおよそ半分と、安い料金の設定が可能になっています。

また、水の硬度も中庸、臭気もなく、塩素などの異物の混入が少ないことから味もより自然、地下水のた

め一年中16前後の水温に保たれている結果、夏は冷たく冬は暖かい水と言われ、いわゆる“美味しい”と言われる水の条件の多くを満たしています。地下水の流れる速度から言えば、昭島の水道水は30年前のミネラルウォーターと言っても良いのではないかと思います。

— 昨年、昭島市の水道事業は50周年を迎えました。歴史のある分、水道関連施設も古くなってきています。そこで、従来から取り組んでいる、鉛や石綿の水道管からダクタイル鋳鉄製のものへの交換を更に推進する一方、毎年3本の割で、大切な水源である深井戸の浚渫改修を行い、施設の維持に努めています。また、昭島の大切な資源である地下水を守るため、水道部の施設見学会や水道部職員の出前講座などにより、節水の啓発に努めているほか、個人住宅での雨水貯留タンク設置助成（限度額：3.5万円）による雨水の再利用を積極的に支援しています。

昭島市の水収支によれば、降水量の約1/3が地下に浸透するほか、多摩川からの地下への浸透水、昭島市の南に位置する日野台地や加住丘陵からの流入地下水、これら3つが昭島市の地下水の主な涵養源と考えられています。そこで、市内では降水の地下への浸透を促進するため、雨水浸透施設設置の助成（限度額：40万円）を行っています。また、多摩川の水量の回復に寄与するために、“昭島市民の森”を奥多摩町に開設し、市民ボランティアの協力を得て、水源涵養林として管理しています。

最近20年間は、地下水位も安定し、多摩川からの地下浸透水の涵養域と考えられる秋川と多摩川の合流点～拝島橋間の河川水の水質も良好に維持されていることなどを勧告し、市では、2001（平成13）年末、「昭島市の水道システムを東京都の水道システムに一元化することは当面しない。」と宣言しました。「昭島の水道水は市が販売するミネラルウォーターだから、蛇口からそのまま飲んで下さい。」と、市民に向けていつまでも胸を張っていえるように、今後も安くて美味しい水道水を届けるための努力と工夫を重ねて行きたいと思っています。



昭島の井戸は今も健在

## 多摩川に学ぶ

### 多摩川支流の野川源流で学ぶ



特定非営利活動法人  
国分寺市にふるさとをつくる会

理事長 前島 征武

府中本町を始発する武蔵野線に乗車し、北府中駅を経て西国分寺駅を過ぎると左側に森が見える。これが、西国分寺駅から北方約500mのところにある西恋ヶ窪緑地、通称エックス山である。

エックス山の水は、野川に流れこみ、やがて二子橋で多摩川に注ぐ。面積は約15,000m<sup>2</sup>で、近くの農道がX形に交差する杉林を昭和30年代の頃、そこで遊ぶ子どもたちがエックス山と名づけたという。平成13年の春のこと、エックス山一部の地権者に相続税負担が生じ、開発が危惧された。これを憂い、地権者に相談すると「エックス山の保存活動に立ち上がって結構です」という。エックス山の近隣者達が語らって、『国分寺市にふるさとをつくる会』が結成された。その後、各方面の尽力で相続税負担の危惧された部分10,000m<sup>2</sup>が公有化された。

その間にも会では、地権者にお断りして絶えず捨てられるゴミ拾いや、いく分かの手入れをしていた。夏休みともなれば暗いうちから大人も一緒に、ナタを持ってコナラに傷を入れ樹液を出させたくえ、根元を掘り起こすクワガタムシやカブトムシ捕りで森が傷められた。

森を大事にしようと、子どもたちに樹を傷めないムシ捕りを教えるために、平成14年の夏休み期間に『森の教室』を始めた。その後は毎年一教室づつ新たなものを発足し、今では、4教室が行われることとなった。

木登りでは5～6才の子や、小学生1～2年生でも保護者にしがみつき、初挑戦をしる。だが、早くから参加した5～6才の女の子の元気な木登りに刺激され挑戦が始まる。1教室が終わるころには、「もっと続けたい」と声が出るほど目が輝く。子どもたちには、大きな自信を与えている教室ができた。

『森の教室』では、木登り以外に森の手入れや、植物が200種類を越す森の自然観察教室も始まったが、森のかくれんぼや秘密基地遊びの希望が多く出てきた。これらの遊びは、木登りと同様に多くの安全管理者を必要としたので『冒険教室』として別な教室を構築し、思いっきり遊ばせることにした。これらの教室の充実によって変わった事は、大人が先頭にたつて森の木を傷めることが少なくなったことである。

東京都環境保全局発行「東京都の保護上重要な野生生物種」1998年版などを参照するとエックス山の希少種では以下の状況がわかった。

生態の特色では、蝶ではミカン科を食草とするオナガアゲハがいる。低木や枯枝に産卵し、150cm以下の低木や草の葉裏や枝などで脱皮するヒグラシ、低木の下にはニホントカゲがいる。残念ながらキンランは盗掘で無くなった。無くなる可能性のある貴重なものでは、ギンラン・サイハイラン・シュンランなどに盗掘が多い。多様な植生樹木での若木の盗掘は、シャリンバイ・ユズリハ・クロモジなどに多い。協議中であるが、国分寺市の進める伐採や下刈りは、生態系保護のために止めたい。市当局の実施する根拠は、東京都安全安心まちづくり条例としている。近隣の子どもたちが『森の教室』で十分に遊び、教室日以外はエックス山で遊ばないことが、残念ながら子供達に安全な時代となった。「子どもに危険だから」とする森の伐採や下刈りをやめることにより、子どもたちに人気の秘密基地遊びなど自然豊かな森の中で学びながら思いっきり遊べる、宅地街に囲まれた自然生態系の保全された、ふるさとの森づくりをめざしている。ひとりでも多くの仲間の応募が待たれるところである。



「自然観察教室」エックス山のきのこ観察



「森の遊び方教室」の木登り

## 多摩川散歩



### ■ 武蔵野みどり散歩 ■

武蔵野 R 30.0 プロジェクト  
鈴木 圭子

武蔵野市はみどり豊かな街だが、近年、それが減少し、危機感を募らせていた。そこで、みどりの情報を市民の視点から発信できないかと思い立ち、市内の緑被率 30% を目指すことを目標としたグループ「武蔵野 R 30.0 プロジェクト」を立ち上げ、みどりの情報誌『みちまみどり』を企画した。幸いなことに印刷費は横河電機(株)からの協賛を、配布は市の緑化環境センターの協力を得て 2005 年夏に創刊し 1 年になる。'ボランティアで市民が手作り'の季刊情報誌だが、4 人各々の専門技術を活かし「おしゃれで手に取りやすい」を念頭に編集している。「内容が充実している」「デザインがステキ!」と評価を得ていることは嬉しい。

その中でも、市内の公園や緑地を舞台にした「公園ストーリー」のコーナーは人気がある。ここに 2006 年夏号のストーリーを紹介してみよう。

#### <グリーンパーク遊歩道>

〜まちなみどりの記憶〜

新緑がトンネルになっている遊歩道にベビーカーを押して入る。土の道を歩くのは何年ぶりだろう。この道の思い出が甦ってくる。

「おかあさん!みてて!」とふらつきながら自転車のペダルを踏む私。靴先でブレーキをかけて振り向けば、満開の桜吹雪の中、母は幼い弟を抱き、目を細めて見守っていた。

七五三の日、父はカメラマン気取りでこのケヤキの前に三脚を立てた。記念写真には、晴れ着に疲れ、口を尖らせた私と、走り出しそうな弟を必死に捕まえている母と、ひとりカメラ目線の満足げな父が映っている。

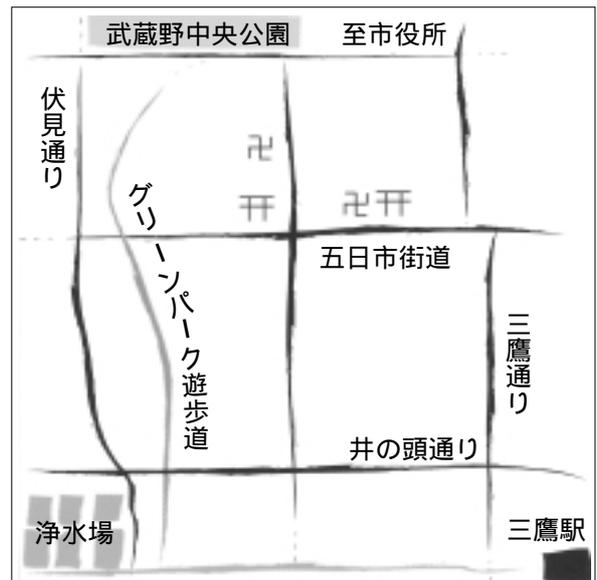
下校途中寄り道をした、とんぼ池の公園は水際の樹木が茂り、落ち着いた雰囲気になっていた。羽化した

ばかりなのか、赤とんぼが草むらに身動きもせず止まっている。さらに遊歩道は続き、夏休みに写生をしたベンチ、どんぐりの木、夏草の匂いさえ懐かしい...

遊歩道の最後には芝生の原っぱが広がる。戦中は中島飛行機、戦後は東京スタジアムとなり、遊歩道はそこまでの引き込線だったという。青空に放物線を描く白球に、歓声が聞こえてきたような気がする。

ベビーカーの娘は昼寝から目覚め、流れる雲を眺めているのだろうか、穏やかな笑みを浮かべている。再びここに住まい、緑に囲まれ子育てをすることに喜びを感じながら、そっと娘を抱き上げた。

武蔵野市では魅力ある公園・緑地づくりが進んでいるが、訪れたことがない...という公園があるのはもったいない。私たちの情報誌を通して新しい公園・緑地のスタイルを体感してほしいと願っている。



グリーンパーク遊歩道マップ



関前公園(トンボ池の掻堀)

## 私と多摩川



### 多摩川に遊び 40 数年

ガサガサ水辺の移動水族館  
館長 山崎 充哲

私は多摩川にほど近い生田で育ち 47 年、小学生の頃から多摩川で魚捕りに夢中になり、魚や川の勉強をしたくて大学は水産学科で学びました。自然環境コンサルタント会社を設立し魚類調査などの生物調査全般、水質調査などを生業としています。多摩川好きから川崎河川漁業協同組合員になり、多摩川の魚や環境を考える毎日です。

多摩川へは年間約 200 日ほど通っています。残りの 150 日は自然環境コンサルタントの仕事で日本中の川の生き物を調査して歩きます。どこの川に行っても『昔は良かった』と聞かされます。過去を振り返る話ばかりです。今まさに川が汚されている現在進行形を嘆くだけなんです。でも多摩川は違います『キレイになったね』がみんなの合い言葉です。今まさに現在進行形でドンドンきれいになっている川が多摩川なのです。

多摩川には大勢の人が遊びに来ます。しかしその人達の多くは水に触れることなく土手を後にします。犬を連れての散歩もウンチをさせるだけで土手を去ります。せっかく河原まで来てもバーベキューをして帰るだけ。すぐ傍を流れる水に触れることもなく、水の中でおこなわれているいろいろな生物の営みや素晴らしさにはコレっぽっちも気がついてくれません。そんな皆さんに多摩川の水に触れている魚や生き物を知ってもらいたい。

「良い子は遊ばない」と言われた場所を「良い子を生む場所」へ変えたい、そんな思いからガサガサ水辺の移動水族館が始まりました。そして時期を同じくして多摩川での中本賢さんとの出会いも私をアクティブにさせました。

移動水族館は場所を選びません。河原でも校庭でも体育館や教室でも移動水族館を開きます。生業の自然観察員の知識を生かし、川に棲む生き物や自然環境などを正しく楽しく皆さんに伝えることを目的としています。水辺での安全で楽しい遊び方などをガサガサ探検隊を通して教えます。依頼があれば多摩川流域でな

くても日本中どこへでもライフジャケット持参で出かけます。河原でも校庭でも、体育館や結婚式場までも水族館にしてしまいます。水族館と同時に実施するタッチングプールは、川に棲む魚に触れさせ感触や生き物に優しく接するという気持ちを育てます。

ガサガサ水辺の移動水族館は、学校や自治体、水辺の楽校などからの依頼で 3 年間で延べ 20 万人に見てもらえました。

この夏はライフジャケットを担いで小学校のプールを廻り、『車に乗るときはシートベルト、水辺で遊ぶときはライフジャケット』を合い言葉にプールでのライフジャケット体験をさせています。しかしマイライフジャケットを持つ子は少なく、水の事故に対する意識の低さに少々ガッカリさせられます。保護者の安全意識を改善させるための努力も必要だと痛感しました。

多摩川では楽しい思い出だけを持ち帰って下さい。悲しい思い出は作らないで下さい。これからもそんな気持ちで多摩川で遊ぶ子供達への手助けと、多摩川の生き物を見守っていかれたらと思っています。

ガサガサ水辺の移動水族館 ホームページ

<http://homepage2.nifty.com/gasagasaaqua/>



移動水族館



ライフジャケット体験

## 財団からのお知らせ 助成研究募集のご案内

### 多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための助成研究募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 清水 仁）は、1975（昭和50）年より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきました。その結果、これ迄に463件（学術研究282件、一般研究181件）の調査・試験研究のお手伝いをさせていただきました。

2007（平成19）年4月からの助成についても、従来と同様、学術研究、一般研究とに分けて、意欲的な調査や試験研究を募集致します。

#### 1. 応募資格者

下記研究対象テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

#### 2. 助成研究対象テーマ

- ① 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ② 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③ 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
- ④ 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査および試験研究

#### 3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」はホームページ上からダウンロードするか、200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

#### 4. 助成の決定

2007（平成19）年3月に開催予定の当財団選考委員会で選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定致します。

#### 5. 応募締切日 2007(平成19)年1月15日(月)

#### 6. 応募にあたっての注意事項

①ご応募にあたっては、当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。

②過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受け付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。  
(次ページへ続く)



「<sup>おおくる も だに</sup> 聖流大黒茂谷の夏」

多摩川源流域の主峰・大菩薩嶺を源流とする泉水・大黒茂谷は、悠久の歴史を刻んだ聖なる渓谷である。躍動感溢れる清流は絶えることなく岩を縫うように流れる。

写真・文

中村 文明

なかむら ぶんめい

多摩川源流研究所 所長  
山梨県塩山市在住

7. 助成研究の種別と条件 (前頁のつづき)

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの (財団のホームページで過去の研究事例をご参照下さい)	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	200万円
単年度の助成金上限額	200万円	110万円
研究期間	最長2ケ年	最長2ケ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 原則対象外、ただし所属機関・個人所有もなく、調査や試験研究に必要不可欠な物品で選考委員会で認められた場合に限る (2) 消耗品費 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等 (3) 旅費 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等 (4) 謝金 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等 (5) その他 器機・設備などの賃借料、通信費、その他	
尚、学術研究へのご応募は、研究計画の全てが助成金によるものではないこと 旅費、謝金は、それぞれ助成金要望額の30%程度を上限の目安とすること、の2点に特にご留意下さい。上限の目安を大幅に超える場合は、その理由を詳細に記した説明書を添付し、申請書と併せてご提出下さい		

発行日 平成18年9月1日

編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

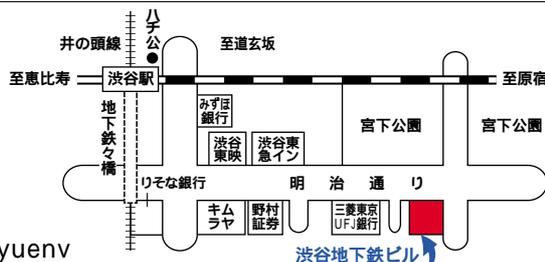
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>



印刷所 雄文社 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-11-1 TEL (048)831-8125